



「新型コロナウイルスによるパンデミックは、ことばと社会、そしてコミュニケーションにとってどんな意味をもつのか。」これが本特集の趣旨である。考えてみればこの30年余りの間、ドイツ統一、アメリカ同時多発テロ、東日本大震災など、予期することのできない出来事があった。そのどれもが、多言語化の推進、英語だけの情報の危うさ、安全神話の崩壊など、ことばと社会の問題に関係していた。だが、今回の新型のウイルスは、これまでの局地的な出来事とは異なり、世界中のすべての人間が、住んでいる場所、人種、ジェンダー、信条、お金や権力のあるなしに関係なく感染してしまう危険がある。つまり誰にとってもひとごとではない。ところが人間は、国レベルでも個人のレベルでも協力してこれに立ち向かうのではなく、立場

特集

パンデミックの社会言語学

や考え方の違いによって別々に行動し、時には敵対し、責任を擦りつけたりしている。環境保護や格差の是正といった問題とも通底するが、互いにコミュニケーションすることができるのに、コミュニケーションしようとしない。医療従事者や五輪アスリートにひどいことばを浴びせかけるケースまである。どうして、こんなことになってしまうのか。

コロナは私達に反省を促しているかのようにも思える。もちろん、新たなコミュニケーションの形やこれまで見えにくかったネットワークも明確になった。コロナによってもたらされた生活世界における変化は、そのままことばと社会の新たな問題として把握することができる。その新たな問題を解決するためにも、私たちはコミュニケーションを続けていくしかない。

(山下仁)

パンデミックの社会言語学

[序論]

パンデミックの
社会言語学

現在の課題とこれからの展望

パトリック・ハインリッヒ 山下仁

Patrick HEINRICH

やました・ひとし

パンデミックの前には戻れない

10年後、すなわち2030年になったころ、人々はパンデミックについてどんなことを覚えているだろう。きびしい隔離政策、日常生活でのさまざまな制約、「三密」、「緊急事態宣言」、「エッセンシャルワーカー」、それとも感染しないように気を付けながら危機の中で働き続けた母親の大きな負担とストレスだろうか。おそらくこれらの現象のいくつかは断片的に思い出されることがあるだろう。しかし、パンデミックがもたらした二つの大きな変革は、だれもが忘れることなく記憶にとどめているに違いない。その二つの変革とは、第一に「国家の復活」である。つまり制限のない新自由主義時代の終焉と新たな格差の拡大。そして第二に、これは本号にとってより重要なことだが、あらゆる生活圏における「デジタル・トランスフォーメーションの加速」である。

「デジタル・トランスフォーメーション」とは、以前アナログで提供されていたサービスのすべて、もしくはその一部が、コンピューターや携帯電話で管理することのできるデジタル・サービスによって置き換えられることを意味する。会議や授業、試験やカスタマーケアなど、すべての社会的な活動が長期的にはデジタルでなされることになるだろう。つまり、もはや「パンデミックの前」のような生活に戻ることはできない。考えてみれば、私的な日常生活

は、ずっと以前からデジタル化されていたのである（「ことばと社会」編集委員会2013）。

デジタル・トランスフォーメーション

デジタル・トランスフォーメーションがことば、社会、コミュニケーションに及ぼす影響の大きさは果てしない。この変化はコミュニケーションの方法、コミュニケーション・パートナーの選択、そしてコミュニケーションのプロセスに現れるものであり、社会言語学の研究対象として非常に興味深く、注目すべきものである。その変化に鑑みると、ハイムズ(1979)の有名なコミュニケーションの民族誌のモデルは、どんな社会であれ、再検討されるべきであろう。

さらに、コミュニケーションそのものの意味が大きく変化したことを確認することができる。特にコロナ禍において、コミュニケーションが政治的意味を帯びることとなり、社会の二極化はさらに進行している。したがって、パンデミックは社会に何らかの変化をもたらしたのか、という問いには、肯定的に、その通りだと答えることができる。たとえば米国、ブラジルあるいはイタリアで認められるコミュニケーションの政治化を見ても、「パンデミックの前」のコミュニケーションに戻ることはできない。社会言語学の観点からも、「正常に戻る」ということはもはやあり得ない。というのも、パンデミックの前の「正常」の状態そのものが、存在しないからである。ことばの使用が絶えず変化するということは、社会言語学の自明の理である。パンデミックに関して驚くべきは、変化そのものではなく、言語およびコミュニケーションの変化がいかに速く、いかに柔軟になされたかということなのだ。以上を踏まえ、現在の社会言語学の課題とこれからの展望について考えてみよう。

変化の範囲について：2021年現在

コミュニケーションの形態の拡大

パンデミックの社会言語学の研究課題について考察する上で注目すべきは、